学び・教養・品格

商学部長
酒井正三郎（さかいしょうさぶろう）

学窓を巣立つ卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。私はみなさんに、学び・教養・品格という三つの言葉を送りたいと思います。

このところ、いわゆるビジネス・エリートというべき社会人による「犯罪」がマスコミを騒がせています。「粉飾決算」「耐震偽装」「偽計取引」といった言葉を新聞で目にしない日はありません。たしかに、一部の人間による問題行為はいつの時代にもありました。しかし、最近の事件は、社会自体の構造変化を背景にして起きているように思います。

前世紀末の冷戦構造の崩壊以来、体制的緊張感を欠いたグローバリゼーションの進展や市場原理主義の強まりとともに、日本の社会においてもさまざまな分野に大きな変化の波が押し寄せてきています。実力主義や成果主義といわれるとおり、世の中の価値観の多くが、結果がすべてという方向に大きくカジを切ってきています。いわば個人の選好を超えた力が、外から個人に向かって懸かってくる時代、それが今という時代の特徴です。

かかる時代を生きる上で大切なこと、それはその人の行動基準の中にものごとの善悪を判断する力が身に付いてつねにある、ということです。これはハウツーを主体にした知識によって育まれるものではありません。むしろこれは、学びつづける意志によって教養を磨き、それを豊かにする努力をつうじて得られるもの、状況を解釈し、それへの自己のかかわりについて客観的な意味づけを行う訓練によって身に付く力です。換言すれば、自己を相対化したり、自己を律したりする力が必要とされている、ということです。そして自己規律があってはじめて、その人に人間としての品格が備わってくるものであるように思います。

みなさんの前途が洋々たるものでありますよう祈念しています。